若者の成長と労働者協同組合

高成田　健（労協センター事業団）

○イタリア労働者協同組合を見学して

・ 業務研修については非常に力を置いて取り組まれている。
・ 若い人が社会的弱者の就労や生活支援をする協同組合にやりがいを感じ民間会社から引き抜かれて力を発揮している。
・ しかし出資・経営・運営に組合員は大きくは関与していない。
　※カポダルコ「協同組合としての教育は管理部門のみ実施」※
　「理念教育は個々ではやっているが大きな位置付けでない」
　「就労動機は給与、雇用継続、よい仕事、分配」
・ Ａ７７では組合員･ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ･利用者の参画やプロセスに重きを置いていた。

※理事長パウロさん（３６歳）の考え方に大きなこだわりがある。
「ひとつひとつの課題をこなすのではなく、そのことを実践する中でその人自身が社会とどう変わっていくかが大切」

○私たち労協センター事業団のこだわり

・ イタリアの労働者協同組合を視察し改めて、自分たちの特徴を知った。
・ 全組合員経営、自分の給与２ヶ月分の出資目標、団会議による意思決定。
⇒小さい単位（事業所）での経営の強さ、意識の高さ、事業の質、新しい事業への展開がうまれている。
⇒仕事全体に対する自分の意識の高さにつながる、所有→責任→意欲。

○現在の日本の若者の就職状況

・ 大量生産、大量消費、大量廃棄のなか仕事に対する動機付けが弱くなる。
・ 代替製品･代替ｻｰﾋﾞｽが多様にある中、その仕事への動機付けは弱く更に巨大組織化した会社での断片的な仕事に対しても就労動機は弱くなる。
・ これらがフリーター、引きこもり、若者

の離職率の高さにつながる。
⇒仕事＝就職＝お金を稼ぐために会社に入って仕事をする。
⇒仕事が生活や人生とリンクしない。

○労協センター事業団における若者の成長

・ 清掃など地域の末端な仕事を若い人も実際に作業に入り仕事を覚えていく。
・ 働く人が組織全体を常に考える運営をしてきた（出資・経営・労働）。
・ 高齢者と女性が多く働くなか若者が前線で交渉や運営の中心を担ってきた。
⇒組織運営の全体像を把握することにより主体的な参加を促す。
⇒周りが支えてくれるなか、新しいことへ挑戦できる。

事例）

１佐藤舞夢 （東京中部事業所） 全国代表者会議発言より H15.12.11

「高校生バイトからやりがいある仕事への参加」

私は高校2年生の時から事業団で学校清掃のアルバイトをしていました。 仕事場の雰囲気、 人間関係が良く自分の友達も誘って学校清掃のある春休み、 夏休み、 冬休みをいつも楽しみにしていました。 学生の時は事業団は掃除屋だと思っていましたが、 あまりの多種多業に驚きまして、 興味を持って今年の4月に入団しました。今ではバイトをして中部事業所の人たちと知り合えたことに感謝しています。 この不況の中では良い事ばかりではなく、今年の3月に役所の入札物件がなくなったり、 単価が大幅に下がったことで自分が入団した4月の時点では一人おけない状況でした。 そんな中で当たり前のことなんですが、 自分の人件費を稼ぐことや、 来年の仕事の確保や、 来年からの基盤を安定させていくことがいかに難しいことか身にしみて感じました。

私は現在福祉や清掃、 病院の電話交換、売店業務などを主にやっています。 中部事業所での普段の環境を一言で言いますと所長の頓所さんに会うたびに怒られてばかりいます。 頓所さん自身も入ったばかりの頃、 岩城理事長や東京事業本部の森弘さんにさんざん怒られたそうです。 「こんな仕事の仕方じゃ現場切られるぞ」 とか 「オーナーの心をもっとつかめ」 とか言われたそうです。その時教えられた緊張感や危機感を今の私にも持つようにと怒られながら色々なことを教えられています。今年の3月に起きたような入札時の不安はまた来年再来年も続いて消えることはないわけで、 現実中部も今まで何とか持ちこたえてきましたが原価率は 80%とぎりぎりの状態で、 今度の入札時期になればこの前と同じようになるという可能性もあり、 現実は何も変わっていないという状況です。 相変わらず厳しい状況ですが、 入団してすぐどうなるかわからないという怖さを実感したからこそ、 今ある仕事のありがたみを感じ、 不安の中で一緒になって助けてくれた中部の人たちの存在の大切さを感じました。 今までと同じように既存の事業を中心に守りながら、 今後広がる可能性のある中野養護学校の3級ヘルパー講座や中部事業所内にあります地域福祉事業所 「まめのき」 を活性化させるなどして、 引き続き頓所さんに怒られながら頑張っていきたいと思います。

２船越謙 （川口事業所） 新人研修会報告より H15.11.15

「見返すなかから自分の成長への意識の変化

へ」

労協に入ってなにも伝えられずすぐに水戸に飛ばされた。 とにかく清掃をしっかりやれといわれ一生懸命やっていたら、 あるときなんで外に向けて営業に出ていないのかと突然怒られた。 そんな指示を受けていないとは思いつつ、 確かに規模の小さい現状では食べていけないことは明白で営業に回るようになった。 しかしそのやり方も何も教えてくれず、 とにかく失敗を繰り返しつつ、 しかし体で覚えていった。 その後２回の移動を繰り返し川口に配属。 今度も行くなり駐車場誘導の仕事がなくなり、 本部からは物凄く怒られ、 自分のせいではないと頭にきた。 しかし誘導の仕事をしていた組合員がその後も一生懸命清掃の仕事をしているのを見たとき、 必至になってこの仕事を続けていこうとしている組合員がいるのに自分は何をやっているのかと思った。 与えられた環境で全力で仕事をしているのかと自分を見つめ返した。 見返す気持ちも含めてとにかく一生懸命やろうと思った。 何事も現状を批判しているだけでは始まらないく、 物事を反対側から見ることも大切だと思った。 本部や組合員に上から下から言われるのも自分を鍛えてくれていると思うと、 むしろ感謝の気持ちが出てくる。 マイナス×マイナス＝プラスである。

３村岡斉 （前場氏地域福祉事業所） 代表者会議発言より　H15.12.1

「講座の運営、 企画書の作成から確信を掴む」

労協に入って清掃の仕事にまず入りまして、 デイケアの調理をして、 ヘルパー講座の運営をしてヘルパーの資格を取りました。 調理師の試験を受けたりしてすごく勉強になった。入って3年目ということもあって、壁にぶちあたったり悩んだりしています。２年目に同じ年の人が高齢協に入ったり、 今年も若い人が1人入って、同じくらいの年代の人が頑張っている姿を見て、 自分も頑張らないといけないなと思っています。 どうして仕事を続けられたのかなと考えると、去年ヘルパー講座の運営をして自らも受けたんですが、 実習の最後の日に息子さんが亡くなったという人がいて日程を調整したら、最後の日に目に涙を浮かべて 「村岡さんありがとう」 と言われた。 もう一人元暴走族の子がいまして、 「講座を受けて仕事をするという約束で少年院に入らなくて済んだんだ」 と言われて、 僕みたいな男でも人の役に立てるんだなと思ってすごく嬉しかったです。

公立保育園の運営についての話が市から提案書を出してくれという話があって、 それは空振りだったけれど、 今は雇用能力開発機構へ上級ヘルパー講座の提案を事業本部と一緒にしています。 色々なことに挑戦できるし、 可能性のあるところだと最近ようやく確信に変わってきたところです。

腰を痛めて今年限りで黒沢所長が退団することになりました。 今まで御苦労様でしたと言いたいです。 群馬の所長だった大塚さんも事業本部長になり異動になりました。 今まで柱になっていた2人がいなくなっても皆で協力して頑張って今まで以上のものをつくっていきたいと思います。

４ 高成田健 （東関東事業本部）

「多世代、 多種多様な人とのつながりから学ぶ」

労協は若い人が自分の親や祖父母のような年齢差のある人たちと働き、 しかも現場のまとめ役やオーナーとの交渉をやらされる。 最初はどんな乱暴な組織かとは思ったが、 いま振りかえると貴重な経験を積ませてもらっていて、 そのおかげで自分も大きく成長できていると思う。 入団してすぐに

清掃の現場に入ったが、そこで毎月団会議で倍以上歳が離れた組合員と喧喧諤諤やりあいながら意見をまとめていったことがあったからこそ、その後別な分野である物流業務を立ち上げたり福祉の仕事も立ち上げてくることができたと思う。また一般的には考えられないが、２０代そこそこで病院や生協のトップと話し合いをしたり、地域の諸団体に呼びかけて大きな集会を企画したりということも、自分の成長につながっていると思う。

社会との接点が見えにくい現在、一人でも生きていける錯覚に若い人が囚われがちである。しかし実際には多くの人に支えられて生活が成り立っていると思う。そこの生活実感を労協は一人一人が仕事全体を常に考えながら行なう組織のため、日々の業務を通じて学ぶことができるのではないか。生活実感がでてくると、自分の住んでいるところにも様々なネットワークがあることを知る。そういったネットワークで、今度は自分の仕事で得た協同の理念や運営の知識を逆に生かすことができる。昨年私は自分の住む松戸市稔台地区の「福祉のまち提言委員会」の公募委員として１年参加しました。そこで仕事で得た知識を生かし、どういった高齢者サービス制度があり、どういったサービスが足りなく、どういったサービスが地域で求められているかという提言や、その運営組織としてどのような理念や形態の組織が望ましいかなどを提言し採用してもらった。逆にそこで得たことで仕事に活かそうと思ったことは、地域住民からはなかなかそこに存在していても福祉事業所と言うのは見えにくい存在であり、門を叩きにくい場所だと言うことがわかった。したがって積極的にサービス事業所のほうから仕事以外のことで地域に溶け込む必要があることを知り、映画や漫才など娯楽･文化活動を地域に提供するグループ「折り梅の会」を習志野でつくり活動している。

○まとめ

- 労働者協同組合の活動は現代の若者にとって足りない生活実感を仕事を通じて学び、そして生活も豊かにし、生活が豊かになることにより更に新しい地域に根ざした提案を仕事で出せるという好循環を生みだしているのではないか。
- この好循環が若者の成長を促しその成長の実感が厳しい労働環境にもかかわらず若者が就労しつづける動機となっているのではないでしょうか。